舞姫

森鷗外

石炭はもう積み終えた。中等室のテーブルの周囲はひっそりとして、電灯の光だけが空しく明るい。今夜は毎晩のようにここに集まってくる花札もホテルに泊まっていて、船に残っているのは私一人であるためだ。五年前のことになるが、かねての宿願がかなっての官命を受け、このサイゴンの港までやって来た時には、目に見るもの、耳に聞くもの、何一つ新鮮でないものもなく、筆まかせに書き連ねていった紀行文は、毎日何千言に及んだことだろうか。当時の新聞に載せられて、のをしたが、今になって思えば、い内容、身の程知らぬ、そうでないものも平凡な動植金石の類、そして地元の風俗などまで物珍しげに記していったものを、心ある人々はどう思ったことか。今度帰国の途についたときは、日記を書こうと思って買ったノートもまだ白紙のままであるが、それはドイツで学問をした間に、一種を身に養ったのでもあったろうか。いや、そうではない。これには別の理由がある。

実際、日本に帰る今の自分は、西洋に船出した往年の自分ではない。学問は依然として満たされぬ不満も多く残っているが、世間のもそれなりにめた。他人の心が頼りにできぬことは言うまでも無く、他ならぬ自身の心までもがいかに変わりやすいものであるかもよく分かったつもりだ。自分の価値観が一変してしまったその瞬間の感動を、どうったら読む者に分からせることができようか。これが日記の書けぬいわれであるというわけか。いや、ちがう。これには別の理由があるのだ。

ああ、ブリンジーシーの港を出てから、早くも二十日余りが経った。ふだんなら初対面の船客とも握手を交わして、旅のつれづれを慰め合うのが航海のならわしというものだが、気分がすぐれないことをいいわけに船室に籠り放しで、同行の日本人たちにも口を利くことがまれなのは、人知れぬ悲しみに心をうちひしがれているためである。この悲しみは初めはの雲のように私の心をかすめ過ぎて、スイスの山の景観も見せず、イタリアの古代遺跡にも注目させず、次には世を憎み嫌い、わが身にも絶望して、に暮れてがちぎれるともいうべき激痛を負わせ、今は心の奥に凝り固まって、一点の陰影にすぎなくなったが、それでもなお書を読むたびに、物を見るごとに、あたかも鏡に影が映り、声に反響が伴うように、瞬時に限りない思い出の感情を喚び起こして、幾度となくわが心を苦しめるのだ。ああ、どうしたらこの悲しみの情を消し去ることができようか。これがもし他の悲しみであったなら、に詠んだ後は気持ちがさっぱりと吹っ切れることもあるだろうに。こればかりはあまりに深く自分の心に深く刻まれてしまったので、そうもいくまいと思われるが、今夜は周りに人影もなし、ボーイが来て電灯のスイッチを切るまでまだ時間もありそうなので、さてその事のあらましを文章にしてみることにしよう。

私は子どもの時から厳しいしつけの下に育ったおかげで、父親を早くに亡くしたが、学問がおろそかになることはなく、藩制時代の学館に在籍していた頃も、後東京に上京して大学予備門に通っていた時も、大学法学部に入った後も、太田豊太郎という名はいつもクラスの首席の位置に記されていたので、一人っ子の私を頼りとして暮らしていた母の心はを得ていたと思われる。十九歳になった時には卒業して学士の称号を受け、かほど若年にして得た栄冠は大学創立以来またとない名誉なことであると人にも言われ、ある官省に出仕して、故郷にいる母を帝都に呼び迎え、楽しい年月を送ること三年ばかり、の評価も格別であったため、洋行して一課の実務を研修せよとの命を受け、わが名を上げるのも、わが家を興すのも、今この時だとの気持ちが勇み立って、すでに五十歳を過ぎた母に別れることもそれほど悲しいとも思わず、はるばると故国を離れてこのベルリンの帝都にやって来たのである。

私はとした功名心と、節制に慣れた勉強努力の力を頼りに、ひた走りに努めて、今たちまちにこのヨーロッパの新興大国の国都の中央に立った。なんという輝きであろう、わが目を射ようとするものは。なんという色彩であろう、わが心を誘惑しようとするのは。の下と日本語に訳した時は、の場所であるかと思われるが、この一直線に延びたウンター・デン・リンデン通りに来て、両側の石畳の歩道を進む男女の集団を見るとどうだろう。胸を張り肩をそびやかして歩む士官たちが、まだ皇帝ヴィルヘルム一世が街路に沿った宮殿の窓から往来を見下ろしておられる時代であったから、色とりどりの装飾を施した礼装姿で道を行く、あるいは美しい少女たちがパリ風を気取った化粧をほどこして通りをるなど、どれもこれも目を驚かさないものはない中に、車道のアスファルトの上を音も立てずに走る様々の馬車、雲にそびえるかと思われてする石造建築が少し途切れた所には、晴れた青空に夕立でも降るかと思わせる音をとどろかせて漲り落ちる噴水の姿、さらに遠く眺めるとブランデンブルク門を隔てて緑樹が枝を交わしている中から、中空に浮かび上がる塔上の像がく。この幾多の景物がしと群がり集まる壮観は、初めて当地を訪れた者にはとうてい味わい尽くすべくもないのも無理からぬほどだ。けれども私の心にはたとえどのような所を訪れようと、いたずらに美しい外観には振り回されまいという決意があり、絶えず自分をめがけてやってくるこうした物たちをさえぎり止めるのだった。

私が呼びのを引き鳴らして取り次ぎを頼み、正式の紹介状を出して日本より来訪のを伝えたプロシアの役人たちは、みな快く私を迎え、公使館からの手続きさえ無事に済んだなら、何なりと、案内しようと約束してくれた。嬉しかったのは、故国でドイツ、フランスの言語を学んでおいたことだ。彼らは初めて私に会ったとき、どこでいつの間にこれほど習得したのかと尋ねないことはなかった。

そうして、公務の余暇があるたびに、あらかじめ正式の許可を得ておいたので、地元の大学に入学して政治学を学ぼうと、学籍簿に記帳してもらうことにしたのである。

ひと月、ふた月と過ごすうちに、公務の会議も済んで、調査も順調に運んでいったので、至急案件を報告書にまとめて故国に送付し、それ以外は調査記録を残していきながら、ついには何巻にもなった。大学ではまた、素朴な考えから想定していたような、政治家になるための特別な学科というものなどで、あれかこれかと迷いながら、二三の著名な法律学者の講座の末席をすことに決め、学費を納めて聴講に出かけることにした。

こうして三年ほどの月日は夢のように過ぎ去ったが、来たるべき時が来ればいくら抑えても抑えきれないのは人の本性というものか。自分は父親の遺言を守り、母親の指導に従い、他人があれはだなどと賞める言葉のうれしさに勉学に精励してきた幼少時より、官長に有能なを得たとはげまされた喜びからたゆみなく勤務してきた現在に至るまで、まったく受動的、機械的な人物となりおおせてしまったことに無自覚でいたが、いま二十五歳にもなって、また長らくこの自由な大学の学風に感化されたせいか、心中なんということもなく落ち着かず、奥深くにみ隠れていた本当の自分というものが、だんだん頭をもたげ、過去の自分のいつわりの姿を攻撃しはじめたようなのだ。私は自分が当世を浴びる政治家になる適性を持たず、また法典を自家のにたくわえて人を裁く法律家となるにもふさわしくないことを悟ったと考えた。ひそかに反省してみると、わが母は私を生きた辞書にしようとし、官長は私を生きた法律にしようとしたのではなかろうか。生き字引となるのはまだ我慢できても、歩く六法全書になるのはどうもごめんだ。これまではささいな問題にも、極めて丁寧に対応してきた自分が、このごろ官長に差し出す文書には、法制の細目にすべきでないことをしきりに議論し、いったん法の根本精神を理解しえたなら、紛々たる万事はの勢いで片づくにちがいないと憚りなく主張するに至った。また大学では法科の講座はそっちのけにして、歴史・文学に関心を寄せ、そのおもしろさが分かる域に達してきたという次第だ。

官長は元来、意のままに操れる人形を作ろうとしたのであろう。それが独立の考えを抱いて、人と歩調を合わせぬ面構えをした男などを喜ぶわけがない。私の現在の地位はきわめてあやういものであった。だがこれだけでは、さすがに私の地位をすには不足なのだったが、日ごろベルリンの日本人留学生の間で、ある有力な一団の学生と私との間で、おもしろくない関係があり、連中は私をそねみ疑い、とうとう官長に私をするに及んだのである。けれどもこれもあながち理由のないことではなかった。

彼等は私が一緒にビールの杯を挙げず、玉突きのも取ろうとしないことを、くそまじめな性質とやせがまんの習慣とのせいであると決めつけ、ばかにするかみんだに違いない。しかしこれは私を理解しようとしなかったためだ。ああ、このの真の理由は、この私自身が自覚せずにいたものを、どうして他人の悟るわけがあろう。わが心はあの合歓という木の葉のように、物に触れると縮んで避けようとするのである。わが心は世間知らずのと同じだった。私が子どもの頃から目上の指導に従い、学問に努め、官吏を務めてきたのも、どれも勇気があってなしえたのではない。勤勉努力の振る舞いもまた、みな自分と他人と欺きとおした結果であり、人がたどらせた道を、ただ一筋にまっすぐたどってきたに過ぎない。他に気を散らすことがなかったのは、外の誘惑を捨てて顧みぬほどの勇気があったためではなく、ただもう外界のを避けて自分から手も足も伸ばさなかったためにほかならぬ。故国をする前も、自分がひとかどの才能を保有することを疑ったことはなく、またいかなる勉励辛苦にも堪えうることを深く信じていた。ああ、それも一時のことだ。船が横浜を離れる瞬間まで、立派な豪傑よと思っていた自分が、せきあえぬ涙にハンカチーフを濡らしたのをわれながらおかしいと思ったが、これこそむしろわが本性だったのだ。この心は生来のものであったか、それとも早く父親を亡くして母一人の手で育てられたせいであっただろうか。

彼等がするのは当然のことといえる。けれども嫉妬するのはあまりに愚かではないか。この憐れむべき弱い心を。

赤くまた白く顔を塗りたくって、燃えるような原色の衣服をまとい、カフェの席に座って客を引くを見ても、行って戯れるだけの勇気がなく、またを被り、鼻を掛けて、プロシア国では貴族ででもあるかのような鼻声でしゃべるを見ても、行って共にふざけ回る勇気を持たない。これらの勇気がないので、例の遊びに積極的な同国人たちと交際する機会が得られない。この交際が成り立たないために、連中は単に私を馬鹿にし、また嫉むにとどまらず、さらには疑いの目で私を眺めるに至った。こういう次第で、私は無実の罪を負い、わずかの間に果てしない苦難をなめ尽くすことになったのである。

ある日の夕暮のこと、私は動物公園を散歩して、ウンター・デン・リンデン通りを過ぎ、モンビシュー街の下宿に帰ろうと、クロスター小路の古い教会の前までやって来た。あのガス灯の海のような大通りを通り過ぎて、この狭く薄暗い横丁に入り、階上の手すりに干したままのシーツだの、下着などまだ取り込む様子もない人家だの、ほお髭を長く伸ばしたユダヤ教徒の爺さんが戸口に立っている居酒屋だの、一方の階段はすぐに屋根に至り、もう一方の階段は道路下の穴倉に住む鍛冶屋の家にそのまま降りていく貸家だのに向かい合ったところには、凹の字の形に通りから引っ込んで建てられたこの三百年来変わらぬ古寺、欧州の歴史のひだを刻むこの遺跡のたたずまいを仰ぎ視るたび、私はうっとりと見とれて幾度立ち尽くしたことであったことだろう。

さて今この例の空間を通り過ぎようとしたとき、閉め切った教会の表門の扉によりかかり、しのび声で泣く一人の少女の姿を私は見とがめた。年のころは十六、七くらいだろう。頭に被ったスカーフからこぼれた髪の色は、薄い金色で、着ている服は他の子どものように垢で汚れた風もない。私の足音に驚かされて振り向いたその顔は、自分には文筆の才能がないのでここに描写することもかなわないが、この青く澄みきって物問いたげに憂愁を帯びた目が、なかば涙の露を宿した長いまつ毛にわれたこの目は、何ゆえただ一度振り返ったばかりで、私のこの用心深い心の底にまで焼き付いてしまったのか。

彼女は予想だにしない深い悲劇に遭遇して、なすすべもなく、ここに立って泣いているのだろうか。いつもの臆病は深い同情の前に影をひそめ、私は思わずそばに近づき、「どうして泣いていらっしゃるのですか。なまじ顔見知りであるよりも、赤の他人のほうが、こんな場合は手助けになることもあるかもしれません。」と声を掛けたのだが、われながら自分の大胆さにあきれたことだった。

彼女はびっくりして私の黄色人種らしい顔をじっと見つめていたが、私の率直できまじめな様子が顔の表情にも出ていたのか、口を開いた。「あなたはよい方のようですね。あいつのようなひどい人とは違うわ。それと私の母のような･･････」ここまで言うと、一時途絶えていた涙はまたを切って愛らしい頰を伝って流れ落ちていく。

「あなたは私を助けてくださいませんか。このままでは私は恥知らずの人間になってしまいます。母は私があいつの言うとおりにならないというので、私を打つのです。父が死んだのです。明日は葬式を出さなければならないのに、家には一文の貯えもないのです。」

それからあとはすすり泣くばかりだった。私の目はこのうつむいた少女の震えるうなじにずっとがれていた。

「家までお送りしますから、まずは気持ちを落ち着けて。泣き声を他人に聞かせてはいけません。ここは往来なのだから。」彼女は話すうちに、思わず私の肩に身を寄せかけていたのだが、この言葉を聞いてふと頭を上げ、また初めて私を見たかのように、恥じらって私のそばを跳びしざった。

人に見られるのを嫌がって、足早に歩む少女の後について、教会の筋向こうの大戸を開けて入ると、縁の壊れ落ちた石の階段があった。これを上って四階めには腰を曲げてようやくくぐれそうな扉がある。少女がさびた針金の先をねじ曲げて作った呼び鈴に、手を掛けて強く引くと、中ではしわがれた老人の声で、「誰だい。」と尋ねた。エリスが戻りましたと答える間もなく、扉を手荒に開けて現れたのは、なかばしらがになった髪で、人相が悪いというのではないが、長年の貧苦の跡を刻印したように深いしわを刻んだ老夫人で、古ぼけたウールの服を身にまとい、汚れたスリッパを履いていた。エリスが私にをして中に入るのを、老人は待ちかねたように、扉を激しく閉め切った。

意外なあいさつに私はしばらくとして立っていたが、ふとランプの光に透かして戸を見ると、エルンスト・ワイゲルトとペンキで書き、下にと記してあった。これが死んだという少女の父親の名なのであろう。中では言い争うような声が聞こえたが、また静かになって戸はまた開いた。先ほどの老夫人は今度は丁重な態度でただいまの失礼な態度をお許し下さいと言い、私を中へ請じ入れた。戸の中はいきなり台所で、右手の低い窓に、真っ白な洗い立てのの窓掛けを掛けてあった。左手には粗末に積み上げたレンガのがあった。正面の一室の扉はなかば開いていたが、中には白布を覆ったベッドがあった。横たわっているのが故人なのであろう。老人はのわきの扉を開いて私を中に通した。この部屋はいわゆるの街路に面した一間であるらしく、天井もない。隅の屋根裏から窓に向かって斜めに下がったを、壁紙でった下の、立てば頭がつかえそうな所にベッドがあった。部屋の中央の机には美しいクロスを掛けて、上には書物一、二冊とアルバムを並べ、陶器のにはここには似つかわしくない高価な花束を活けてある。その横に少女は恥かしそうな表情で立っていた。

彼女はとても美しい人だ。乳白色の顔は灯火に映じてかすかにしていた。手足がかぼそくしなやかであるのは、貧しい家の女のようではない。老夫人が部屋を出て行った後で、少女は少々言い間違いもある言葉で次第もなく話し始めた。「あなたをここまでお連れすることになったあさはかな私をどうかお許しください。あなたはよい方と思います。こんな私を決してお嫌いになることはありますまい。父の葬儀は明日だというのに、頼りにしていたシャウムベルヒ、あなたはその名をご存じではありませんでしたね、あの人はビクトリア座の支配人なのです。そこの座員に雇われてから、もう二年にもなるので、二つ返事で私達一家を助けてくれるものと思っていたのに、人の不幸につけこんで、身勝手な要求を突きつけてくるとは。・・・・・・どうかあなたには私どもを救っていただきたいのです。お金は乏しいお給金の中からお返しいたします。たとえ自分はこれから食べられなくなっても。それも無理なら、母の言葉に・・・・・・。」彼女は涙ぐんで身を震わせた。そのこちらを見上げるまなざしには、人にいやと言わせぬのしぐさがあった。この目づかいは意識してするものか、それとも自分では気づかないものであるか。

私のふところには二、三マルクの銀貨はあったが、それで足りるはずもないので、私はの金時計を外して机の上に置いた。「これで当座のをしのいでいただきたい。質屋の使いがモンビシュー街三番地の太田を探して来たときに代価を渡せばよいので。」

少女はを受けた様子で、私が立ち去る握手のために出した手をに当てたが、はらはらと流れ落ちる熱い涙を私の手のにいだのである。

ああ、なんという悪だろう。この恩に感謝しようと、みずから私の下宿にやって来た少女は、右にショーペンハウアーの哲学書、左にはシラーの全集を置いて、一日中座りっぱなしのこの書斎の窓の下に、一輪の美しい花を咲かせたのだった。この時を境として、私と少女との会合はしだいに数を重ねるようになり、日本の留学生たちにまで知られるほどになったため、彼らは速断して、私が踊り子たちの間を遊び回り、色にっているとみなした。実際には二人の間には、まだ子どもらしい喜びしか無かったものを。

名指しで言うことは避けるが、同国人の中によく問題を引き起すたちの者があり、私がちょくちょく芝居小屋に出入りして、女優といかがわしい交際をしているなどと、そいつは官長のもとに告げた。ただでさえ私が分野外の学問にちょっかいを出していることを気取っておもしろからず思っていた官長は、とうとうこの事を公使館に伝えて、私を、解雇したのだった。公使が私に通達した際の話によれば、がもしただちに帰国する場合には、旅費を支給するが、もしまだ当地にするつもりならば、援助を受けることはできないということだった。私は一週間のを申請して、いかにすべきか思い悩む間に、生涯で最も悲痛を与えた二通の書状に接したのである。この二通はほとんど同時に出されたものであるが、一通は母の自筆、一通は親戚の一人が、母の死を、私がこの上なく愛慕していた母の死を報じてきた書状だった。私は母の書中の言葉をここに繰り返すことができぬ。涙がこみ上げてきて筆の歩みをげるからである。

私とエリスとの交際は、この時までは人が思うよりは潔白なものだった。彼女は父親が貧しいために、十分な教育を受けず、十五の時に踊りの師匠の求人に応募して、この恥かしい仕事を教えられ、を修了した後は、ビクトリア座に出演して、今では座中第二位の売れっ子になっている。とはいえ作家のハックレンダーが現代のと言ったとおり、踊り子の生活は実にみじめなものだった。いくらでもない給料のためにがんじがらめにされ、昼は稽古、夜は舞台と厳しく使われ、芝居小屋の化粧部屋に入ればメイクアップも行い、華美な衣裳を身にまといもするが、場外に出ればただ一人衣食するのもままならぬありさまであるから、まして親兄弟を食わせねばならぬ者はどれほど辛いことであろう。そういう次第で彼女たちの仲間には、賤業婦に身を落とさない者の方が少ないという。エリスがこれをまぬかれてきたのは、元来おとなしい性質であるのと、の父親に守られてきたことによる。彼女は幼い頃から本を読むことがそれでも好きな方だったが、手に入るのはコルポルタージュと呼ばれる庶民相手の貸本屋が担いでくる本の類だけだったのを、私とつきあい始めたころからは、私の貸す一般書を読み習って、少しずつよい趣味を理解するようになり、言葉の誤りも改まり、いくらも経たないうちに私によこす手紙の誤字なども少なくなった。こういうわけで私たち二人の間柄は初めは師弟の関係だったといえる。思いがけず私が免職になったことを聞いたとき、彼女は青くなった。私は彼女がこの件に関与していることを黙っていたが、彼女は私に向かって母にはこのことを隠してくださいと言った。これは私が学資を得られなくなったことを母親が知って私を引き離そうとするのをしたからだ。

ああ、詳しくここに書く必要もないことだが、私の彼女を愛する思いが急速に高まってゆき、ついに離れ難い仲となったのはこの時のことだ。私の一身上の重大事は目の前に横たわり、実にのとは今この時をいうにもかかわらず、このようなことのあるのが理解できず、また非難する人もあるにちがいないが、私がエリスを愛する思いは、初めて二人が出合った時から浅いものではなかったうえに、いま私の度重なる不幸に同情し、また別れに至るかもしれぬ悲しみに沈み込んでうつむいた顔に、の毛がほどけて掛かっている、その美しく、いじらしい姿が、悲痛の、を失ったわが脳髄を貫き、忘我の境においてここに至ったことをどう説明できるというのか。

公使にした日限も近づき、わが命運はここに極まった。このざまで国に帰ったなら、学問もしないうえに罷免の汚名を負ったわが身には再び浮かぶ瀬はなかろう。といってこの国に残留するには、学資を得る手段が見当たらぬ。

この期において自分に救いの手を差し伸べてくれたのが、現在、私と共に帰国の途に就いている同行者の一人である相沢謙吉である。彼は当時東京にいて、すでに伯爵の秘書官を務めていたが、私の免官されたことが官報に出たのを見て、ある新聞社の編集長に相談をもちかけ、私を同社の通信員となし、このベルリンに留まって政治・学藝の記事を報道させるよう取り計らったのである。

社の報酬は言うに足りぬ額だったが、住まいを移し、昼食に行く店を代えれば、ささやかな生計を立てる見込みができる。あれこれ思案をらす間、真心を表して、助けの綱を私に投げかけたのは他ならぬエリスだった。彼女はどうやって母親を説き伏せたのか、私は親子の家にすることとなり、エリスと私はいつからともなく、なけなしの収入を合わせて、苦しい生活の中でも楽しい日々を送れるようになった。

朝食のコーヒーを済ませると、彼女はレッスンに行き、稽古のない日は家事に従事する。私はケーニヒ街にあるの狭く奥行ばかりやけに長いミルクスタンドに出かけて、そこに並べてある新聞を片端から読んでは、鉛筆を取り出してあれこれと通信記事に必要な材料集めをする。採光のために壁に開けた引き窓を持つこの部屋に座って、定職を持たない若者やら、いくばくもない金を人に貸して自分は遊び暮らしている老人、取引所の仕事の合間を盗むようにしてここで一服する商人などと肘を並べて、冷たい石製のテーブルの上で、しげに筆を走らせ、ウェイターが持ってくる一杯のコーヒーが冷めるのもかまわず、空いた新聞が細長い板きれに挟んであるのを、何種類も並べて掛けてある横の壁に、何度も足しげくするこの日本人を、事情も知らない人々は何者だと思ったことだろうか。また一時近くになって、レッスンに出かけた日には帰り道に立ち寄り、私と一緒に店を後にするこの身のこなしの軽やかなこと無く、掌の上でダンスをすることもできそうなドイツの少女を、な顔で見送る人もあったにちがいない。

私の学問はここに頓挫した。屋根裏のがかすかに燃えて、エリスが劇場から帰り、に腰掛けて縫い物などをするそばの机で、私は新聞の原稿を書いた。昔法律の箇条の枯れ葉を報告書の上にかき集めていたのとは異なり、今は生き生きと活動していく政界の動向や、文藝・藝術関係の新たな展開に対する批評文など、互いに関係づけて、力の及ぶ限り、ビョルネよりはハイネに倣って刺激的な構想を練り、さまざまな通信文を次々とまとめていったが、中でもうち続いてヴィルヘルム一世とフレデリック三世のがあり、新帝の即位、ビスマルク侯爵の進退問題などのことについては、特に詳細な報告記事を仕上げたものだ。したがってこの前後からは思いの外に多忙を極め、いくらもない蔵書を引っ繰り返して、昔の学科をやり直すことも困難になり、大学の学籍はさすがにまだ除かれなかったものの、学費を納めることも難しいので、たった一つに絞った講義すら聴講に出掛けることはほとんどなかった。

私の学問は脇道にれた。けれども私は別にある種のを養い得た。それは何かというと、そもそも新聞雑誌・出版事業の普及のは、ヨーロッパ諸国の中でドイツにする国はない。何百という新聞雑誌に散見する議論には相当に水準の高いものが多いが、私は通信員になるとすぐさま、昔官立大学にせっせと通っていた頃にった自己独特の眼力によって、ひたすら読み、かつ写すうちに、今まで一本の道をひたすら走ってきた知識は、自然に総合的になってゆき、本国からの留学生などの大半は、夢にも知らぬに達していた。彼らの仲間にはドイツの新聞の社説すら十分に読めない者があるというのに。

明治二十一年の冬がやって来た。表通りの歩道では滑らぬように砂を撒き、スコップで雪きなどもするが、このクロスター通りの周辺は馬車も行き悩むでこぼこ道のほかは、どこも一様に表面が凍結して、朝、扉を開けると、凍死した雀が落ちているのも哀れをす眺めである。部屋を温め、煖炉に火をきつけても、壁の石を貫き、衣服をしみ通る北ヨーロッパの寒波の激しさは、どうにも堪え切れぬほどものだ。エリスは二、三日前の晩、舞台で卒倒したといって、人に抱えられて帰って来たが、それ以後気分がよくないといって仕事は休み、食事の度に吐くようになったが、これはではないかと気づいたのは母親だった。ああ、ただでさえ心もとないわが身の行く末であるのに、それがもし本当ならどうすればよいのか。

今朝は日曜の朝なので皆家にいるが、私の心は楽しまない。エリスは横にならねばならぬほどではないが、小さな鉄のストーブの脇に椅子を寄せて口数も少い。この時、戸口に人の声がして、台所にいたエリスの母は、まもなく一通の郵便を持って来て私に手渡した。見れば見覚えのある筆跡は相沢のものだが、切手はプロシアのもので、にはベルリンとあった。不審に思いながら開封して読み始めると、こうある。急のことで事前に知らせる術がなかったが、昨夜この地に到着された大臣に随行して自分も日本からやって来た。伯爵はをしたいとのせであるからただちに来るように。君の名誉をするのはこの機会をいてほかに無い。気がせくので用件のみ伝える、という内容である。読み終わってとした私の顔つきを見て、エリスが言った。「お国からのお手紙ですか。悪い知らせではないでしょうね。」彼女は例の新聞社の報酬に関する手紙だと思ったのだろう。「いや、心配するには及ばない。あなたも名前を聞いたことのある例の相沢が、大臣と一緒にこの国に来て私にも声を掛けてきたのだ。急ぐというので、今からすぐに行ってくる。」

可愛い一人息子を送り出す母親でもここまでうことはなかろうと思われる。大臣にすることにでもなったらと思うのか、エリスはつらい身体を起こしてを手伝った。ワイシャツも真っ白なものを選び、丁寧に畳んであったゲーロックという二列ボタンのコートを出して着せ掛け、ネクタイまで私のために手づから結んだのである。

「この姿で見苦しいと思う人はいないでしょう。こちらの鏡台に向かって見てごらんなさい。どうしてそう不機嫌なお顔をなさるのです。私もできればご一緒したいほどですのに。」そして少し真面目な表情になって言った。「いいえ、こうして改まったお姿を見ると、何となく私の豊太郎樣には見えません。」それからまた少し考えてこう言う。「たとえ富貴の身の上におなりになることがあっても、私をお棄てにならないでくださいね。私の身体が母の言葉の通りではなかったとしても。」

「なに、富貴だって。」私は笑った。「政治社会などに出る希望を断ち切ってから何年も経ったではないか。大臣など会いたくもない。ただ別れて久しい旧友に会いに行くだけだよ。」エリスの母親が呼んだ一等は、雪道をらせて窓の下までやって来た。私は手袋をはめ、少し汚れたを背にせて手は通さず、帽子を取ってエリスにしてから階下に降りて行った。彼女はてついた窓を開き、北風に髪を乱すに任せて私の乗った馬車を見送った。

私が下車したのはの入口である。フロントで秘書官の相沢の部屋番号を照会し、長らく踏まなかった大理石の階段を昇り、中央の柱にを覆ったソファを据え付け、正面には姿見を掛けた控室に入った。外套をここで脱ぎ、廊下を伝って部屋の前まで行ったところで、私はしばしためらった。ともに大学にいた頃に、私のぶりを激賞した相沢が、今日はどんな顔をして私を出迎えることかと。さて部屋に入って対面してみると、外見は前に比べるとがよくなったものの、気さくな人柄は相変わらずで、私のもさほど気にしていないらしく見えた。一別以来のあいさつを交わす暇もなく、そのまま連れられて大臣にし、そこで委託されたのはドイツ語で書き記した至急文書を翻訳せよとの事であった。私が文書を受け取って大臣の部屋を出たとき、相沢は後から来て一緒に昼飯を食おうと言った。

食卓ではもっぱら質問攻めだった。彼の生活が大体において順風だったのに対して、私の身はの運命にされ続けだったからである。

私が胸中をして物語ったこれまでの不幸の数々を聞いて、彼は何度も驚きの声を上げたが、むしろ私を責め立てることはせず、反対に他の凡庸な留学生どもをののしった。けれども打ち明け話が終わった時、彼は厳しい表情で私に忠告した。この度の一件はもともと生来のな気質から生じたことで、今さら何と言っても始まらない。とはいえ、学識も才能も十二分の者が、一人の少女への思いにほだされて、いつまで目標のない生活を続けるつもりなのか。今は天方伯もただドイツ語の通訳をさせるくらいのおつもりに過ぎない。自分もまた伯爵が当時君が免官になった理由をご存じのことであるから、無理にその先入観念を取り去ろうとも思わない。伯爵から情実で動く者と見なされでもしたら、友人の役に立たぬのみならず、自分にとっても損なことだからだ。人を推薦するにはまずその能力を見せるのがいちばんだ。これを存分に示して伯爵の信用を勝ち得るのだ。またその少女との関係は、たとえ彼女に真心があろうと、どれほど付き合いが深くなろうと、才能を理解した上の恋ではなく、男女の恋情という惰性的なに引かれて生じた交情に過ぎぬ。この際断固として関係を断て。これがその時の忠告のあらましである。

大海でを失った船員が、はるか遠くに山の影を認めたという場合が、ここで相沢が私に示した指針に当たる。しかし、この山はまだ深い霧の彼方にあり、いつたどり着くやら、そもそも果たしてたどり着けるものやら、かりに達したところで、心から満足できるものであるかどうかも確かには分からぬものであった。現在の生活は貧しい中にも楽しく、エリスの愛は捨て難い。私の気弱さはどうするとも決めかねたが、とりあえず友人の忠告に従って、縁を切ることにしようと約束した。私は自分の領分を侵犯されるのは嫌なので、敵と見なした者には防御の姿勢をとるが、に対してはどうしてもに断われなくなるのだ。

友と別れて表に出ると冬の風が顔を打った。二重構造にしたガラス窓を固く閉ざして、大きな陶器の煖炉の火を盛んにかきたてたホテルの食堂を出たところなので、薄いを突き通す午後四時の寒さはとくに堪え難く、思わず鳥肌が立ったことだが、私は同時に心中にもある種の寒さを覚えたのである。

翻訳はひと晩で仕上げた。カイザーホーフに通うことはこれを初めとしてだんだん多くなるとともに、初めは伯爵の言葉も用件だけだったが、後には故国日本の最近のニュースなどを話題にして私に感想を求め、折々はの途上で同行の人々がした滑稽な失態などを話して声を上げてお笑いになることもあった。

一月ほど過ぎて、ある日伯爵は突然私に向かって、「我々は明日の朝、ロシアに向かって出発する。一緒について来るか。」と尋ねた。私はここ数日、休みなく職務にしている相沢と会っていなかったので、この突然の問いかけは私を驚かせた。「無論ご命令のままに。」私はここで恥ずかしいことを告白しなければならなり。こう返事をしたのはすかさず決断を下した上のものではない。私は信頼を感じ始めた人から、急に何か相談を受けたとき、のことで、その答えの適不適を十分にせず、その場で請け合うことがある。そうして請け合った後で、それが困難であることに気づいた場合でも、その時は無考えだったことを無理にも包み隠し、隠忍して約束をする場合がよくあった。

この日は翻訳の報酬に加えて、ロシア行きの旅費まで合わせてしたのを持ち帰り、翻訳代をエリスに預けた。これでロシアから戻るまでの生活費にあてがうことができるはずである。彼女は医者にせたところ懐妊しているということだった。貧血症の体質のため、数ヶ月間自覚しなかったものらしい。劇場の支配人からは欠場があまりに長くなったので除名したと伝えてきた。まだひと月ほどにしかならぬのに、これほど厳しい処置をとってきたにはわけがあるに違いない。エリスは出張のことはさほど心配する様子ではなかった。それは私の真実の愛情を篤く信じて疑わなかったから。

鉄道で行けば遠くもない旅行なので、特別な用意も必要ない。身のに合わせて借りた黒の礼服、新しく買い求めたゴタ版のロシア宮廷貴族、二三種の辞書などを、小さな鞄に入れたばかりである。さすがに心細いことが何かと多い昨今のこととて、私が出て行った後の家に残されるのもつらかろうし、また見送りの駅で涙をこぼされたりすればそれも心残りになるからというわけで、翌朝早くにエリスを母親と一緒に知り合いの家に出すことにした。私は旅支度を整えて家をし、鍵は建物の入口に住む靴屋の主人に預けて出かけた。

ロシア出張については、格別書き記すこともない。通訳としての任務を果たしたことで、私はたちまち栄進の道を進む人となった。私が大臣の一行に従って、ペテルブルクに滞在していた間、私のまわりを取り囲んでいたものといえば、ナポレオン時代のパリ全盛の豪奢を、そのまま氷雪の上に持って来たかのような宮城の装飾であり、わざわざ飴色のをいくつでも惜しげ無く灯した広間には、胸に勲章の数々をめかせ、肩にはが燭光を反射してさらに明るさを添え、彫刻やのを凝らしたの火に炙られて外の寒さも忘れて貴婦人たちが盛んに使う扇のはためきなどにされて、幾多の貴顕男女の中を、宮廷の公用語であるフランス語をいちばん巧みに使う者はならぬ私であったから、主人側との間を仲介して用をじる者もまた多くは私を措いては無かったのである。

この忙しない旅の間、私はエリスを片時も忘れることはなかった。いや、彼女は毎日手紙をよこしたから忘れようにも忘れられなかった。あなたがお出かけになった日には、いつになく一人で明かりに向き合うのがつらいので、知り合いの所で夜になるまで世間話をし、疲れてから家に帰って、すぐに休みました。翌朝目覚めたとき、まだ一人ここに残されていることが夢ではないかと思ったのです。起き出たときの心細いことといったら、このような思いは、生活が苦しくて、その日の食物が無かった時にも経験したことがありません。これが彼女のよこした最初の手紙のあらましだった。

またしばらくしてよこした手紙は相当に思い詰めて書いたらしく思われた。最初に「いいえ」という語で書き始めてあった。いいえ、あなたを愛する気持ちがどれほど深いものであったか、今初めて分かりました。あなたは故国に有力な親戚もいないとおっしゃいましたし、この国で生活できるよい方便があれば、きっとこのドイツに留まって下さるに違いありません。加えて私の愛情でお引き留めせずにはおきません。それも無理で日本にお帰りになるのであれば、親と一緒にお伴するのはもありませんが、そのための多額の旅費をどこで調達したらよいでしょう。どんな仕事をしてでもこのベルリンに残って、あなたがご出世なさる日を待とうとずっと思ってきましたが、ご出張はしばらくの間とうかがってあなたがお発ちになってからもう二十日あまりになります。別離の思いは日ましに強くなっていくばかりです。別れるのはほんの一瞬つらいだけと思っていたのは誤りでした。私の身がただならぬものであることが外見にもはっきりしてきましたが、それもあることですから、たとえどのような事態が起こっても、私を決して見棄てておしまいになりませんように。母親とはひどく口論しました。けれども私がこれまでとは違い意志を固めた様子を見てを折りました。私が日本に行くときには、ステッチンの方の農家に、遠い縁者がいるので、そこに身を寄せるということです。あなたが書き送って下さいましたとおり、大臣様のご信任がくなれば、私の旅費などは何とかなりましょう。今はひたすらあなたがベルリンにお帰りになる日を心待ちにするばかりです、云々。

ああ、私はこの手紙を読んで今初めて自分の置かれた立場がはっきりと分かったのである。自分の鈍さが恥ずかしくてならぬ。私は自分一己の進退に対しては当然、自分と関係のない他人の処遇についても、自己の決断力の強さをひそかに誇らしく思っていたが、この決断なるものは順境にだけ作用して、逆境に置かれれば何の働きをもなさぬ。私と連なる人々の関係を洞察して処置を下そうとすれば、頼りにしていた理知の曇らぬ鏡もどこへやら。

大臣の信用はすでに勝ち得た。それなのに近眼の自分は果たした役割だけを見ていたのだ。これが将来の道を拓く可能性について先読みをしていたかといえば、神のみぞ知る、全くもって考えもしなかった。それで今ここに気がついて、自分は依然として冷静でありえたか。この前わが友が周旋してくれたとき、大臣の私に対する信用は雲をつかむようなものだったが、今ではいささか信頼も生まれたろうかと思っていたが、相沢の最近の言葉の端々には、本国に帰ってからもこうして二人でやっていけばなどとあったのを何のことかと思っていたが、今思えば大臣がそうおっしゃったのを、友とはいえ官事なので明言を避けたものであったか。今になって思えば、私が軽はずみにも彼に向かってエリスとの関係を断つと言ったことを、すでに大臣に告げたのかもしれぬ。

ああ、ドイツに来たばかりの頃、自己の本領を悟ったと思い、二度と機械的な受身の人間にはなるまいと心に誓ったものだが、これはいわば足を縛られたまま籠から放たれた鳥がしばらくの間羽ばたいたところでこれで自分は自由になったと威張ったようなものではなかろうか。足の糸をほどくことはできないのだ。前にこれを操っていたのは、国の役所の官長であり、今ではこの糸は、ああしまった、天方伯爵の手に握られてしまったのだ。私が大臣の一行とともにベルリンに戻ったのは、正にちょうど新年元旦のことだった。駅で一行に別れを告げて、私はわが家を指してまっしぐらに馬車を走らせた。ここ欧州では今でもの晩に眠ることをせず、夜明しをして元旦に眠るのが習慣なので、辺りはひっそりしている。寒さは厳しく、路上の雪は角の鋭い氷片となって、晴れた日ざしを映し、きらきらと輝いていた。馬車は大通りを曲がってクロスター小路に入り、わが家の入口に止まった。この時窓を開く音がしたが、馬車からは見えず、に鞄を持たせて階段を上がろうとしたとき、エリスは勢いよく駆け下りてきた。彼女が一声叫んで私のに抱きついたのを見て馭者はあきれた顔つきで、何かの中でぶつぶつ言っているようだった。

「よく戻って来てくださいました。お帰りにならなかったら私は生きていられなかったでしょうに。」

私は今この時まで心を決めかね、故国に帰りたいと思う気持ちと自身の栄達を求める願望とは、時としては愛情の強さをも押しつぶしてしまいかねなかったが、ただこの、これまでのしていた気持ちは消え去り、私は彼女をし、彼女の頭は私の肩にれて、その喜びの涙ははらはらと肩の上にった。

「それで何階へ持って行くんだい。」とのような声で叫んだは、さっさと階段の踊り場に上がって立っていた。

戸口の外まで出迎えに出たエリスの母に、これで馭者をって下さいと銀貨を渡して、私はエリスに手を引かれながら、急いで部屋に入った。一目見るや私は驚いた。机の上には白の、白のレースなどをうずたかく積み上げてあったから。

エリスはにっこりとみながらこれを指さし、「何だとご覧になりましたか、この支度を。」と言いながら一枚の木綿の布を取り上げたのを見るとそれはだった。「私のうれしさがお分かりになるかしら。産まれてくる子はあなたに似て黒いをしているのでしょうか。この瞳。ああ、ずっと夢に見ていたのはあなたの黒い瞳なのです。この子が産まれた時はちゃんとお父様として、決して他の名を名乗らせることはなさいませんね。」彼女はうつむいた。「ばかだとお笑いになるでしょうが、教会に行く日はどれほどうれしいことでしょう。」その見上げた目には涙が一杯まっていた。

二、三日の間は大臣も、旅でお疲れのことであろうとこちらからはお訪ねせず、ずっと家に籠もっていたが、ある日の夕暮れ使いをよこして私は招かれて行った。行ってみると特に手厚いもてなしで、ロシア出張のを懇切にねぎらう言葉に続けてこう言われた。自分と一緒に日本に帰るつもりはないか、君の学問の深さがどれほどのものかは知るよしもないが、語学の力だけでも十分御用がまることと思う。この国にもずいぶん長くいたわけだから、いろいろ付き合いもできたことだろうと、相沢に聞いてみたが、そのようなものはないと聞いて安心したよとのお言葉だった。そう語る様子は打ち消すことがためらわれるものだった。しまったと思ったが、さすがに相沢の言葉はでたらめだと言うこともできない上に、もしこの手づるに縋らなかったならば、本国を失うのみならず、名誉を回復する道もなくなり、わが身はこの広漠たるヨーロッパの大都会の人の海に葬られることになるという思いが、一気にこみ上げて来た。ああ、ないとはこのことだ。「承知いたしました。」と私は答えたのだ。

面の皮は鉄のようにどれほどくとも、帰ってエリスになんと言えばいい。ホテルを出たときの私の心中のは、たとえようもないものだった。私は道の東西も分からず、一己の思いに沈んで歩くうち、すれ違う馬車のに何度かられ、びっくりして飛びいた。しばらくしてふとあたりを見ると、動物公園の横に出ていた。倒れ込むようにして道路脇のベンチにもたれかかり、燃えるように熱く、でかれるようにがんがんする頭をベンチの背にせ掛け、死んだような格好でどれほどそこにいただろうか。強烈な寒さが骨までみ通るように感じて目を覚ましたときは、もう夜に入って雪が盛んに降り、帽子のや外套の肩には一寸ばかりも積もっていた。

もう午後十一時を回っていただろう。モハビットとカール街とを結ぶ鉄道馬車の線路も雪にもれ、ブランデンブルク門の辺のガス灯が寂しい光を放っていた。立ち上がろうとするが足がえて動かないので、両手でさすって、やっと歩けるほどにはなった。

足が思うように運ばないので、クロスター通りまで来たときには、真夜中を過ぎていたか。途中どうやって歩いて来たのかも分からない。一月上旬の夜のことで、ウンター・デン・リンデンの大通りの酒場や料理屋はまだ人の出入りも盛んで賑わっていたはずだが、まったく記憶にない。頭の中はただただ自分は許すべからざる罪人であるという思いで一杯だった。

四階の屋根裏部屋では、エリスがまだ寝ていないと思われ、時ならぬ夜空の星のように、暗がりの中にただ一つ見える明かりが、降りしきるのようなに、われたかと思えばまた現れ、あたかも風にばれるかのようだった。建物の入口を入るや疲れを覚え、の痛みがえ切れなかったので、うようにして階段を昇った。台所を過ぎ、部屋の扉を開けて中に入ると、机にれて産着を縫っていたエリスはこちらを振り返り、「あっ」と叫んだ。「どうなさったのです、あなたのその姿は。」

驚いたのも無理はない。真っ青になって死人同然の顔色、帽子をいつのまにかどこかになくし、を乱して、しかも途中何度かものにいて倒れたせいで、衣服は交じりの雪に汚れ、所々は裂けていた。

私は返事をしようとしたが声が出ず、膝がりにわななかれて立つことがわなかったので、そこの椅子をつかもうとしたところまでは覚えているが、そのまま地にした。

意識を回復したのは数週間の後だった。熱が激しく譫言ばかり言っていたのを、エリスが一心に看病するうち、ある日相沢が尋ねて来て、私が彼に隠していた経緯を詳しく知り、大臣には病気のことだけ報告し、うまく繕っておいたのだった。私は病床に付き添うエリスを初めて見て、その一変した姿に驚いた。彼女はこの数週間の間にひどく痩せて、血走った目は落ちくぼみ、血の気を失って灰色になった頬はこけてしまった。相沢の援助で毎日の生計には困らなかったが、この恩人は彼女を精神的に殺してしまったのだ。

後で聞くと彼女は相沢に会ったとき、私が相沢に行った約束のことを聞き、またあの夕方大臣に申し上げた返事の内容を知って、突然席から飛び上がり、土のごとく顔色を失い、「私の豊太郎様、私はここまで裏切られるのですか。」と叫び、その場に倒れた。相沢が母に助けを呼び一緒に助けてベッドに横たえたが、しばらくして目を覚ましたとき、目は直視したまま傍の人の顔も分からず、私の名を呼んでひどく罵り、髪の毛をむしったり、布団を嚙んだりするかと思えば、また急に気がついた様子で何かをしきりに探し求めた。母が取って与えるものをどれもすべて放り投げたが、机の上にあった産着を与えたとき、手に取って顔に押し当て、涙を流して泣いた。

この後は騒ぐことはなかったが、精神の働きはほとんど全く失って、その愚かなことはまるで赤子のようであった。医者に診せると、あまりに激しい心労のために起こった急性のという病気で、治癒の見込みはないという。ダルドルフの精神病院に入院させようとしたが、泣き叫んで言うことを聴かず、後には例の産着一つを携えて、何度か取り出しては見、見てはすすり泣いた。私の病床を離れることはなかったが、これも自覚があってのことではないと思われた。ただ時々思い出したように「薬を、薬を。」と言うだけである。

私の病気は完全に治った。生きたとなったエリスをかき抱いて幾筋もの涙を注いだことは数限りない。大臣に随行して日本に帰還する船に乗ったとき、相沢と相談してエリスの母に生計を立てて行かれるだけの元手の金を渡し、あわれな狂女の胎内に残した子が生まれた時の事も頼んでおいた。

ああ、相沢謙吉のような良友は願っても得られないものに違いない。けれども私の中には一点の彼を憎む心が今日なお残っているのである。